

# インドネシア 伝統芸能ワヤンによる 結核のための啓発活動について



2014年4月21日

ストップ結核パートナーシップ日本

# インドネシアの結核の状況

WHOが定めた高まん延国22カ国のひとつ

- 結核新規登録患者数: 322,882人
- 結核死亡者数 (HIV+TBを含まない): 67,000人
- 罹患率: 10万対185
- 死亡率: 10万対27 (出典 WHO: Global TB Report 2013)

結核患者の約70%が生産年齢 (productive age)



約40年前の日本の状況 1970年罹患率10万対172.3



# インドネシアの結核対策

国家結核対策プログラム(National Tuberculosis Program: NTP)のもと、National Strategic Plan(2002-6,2006-2010)の戦略を実施。

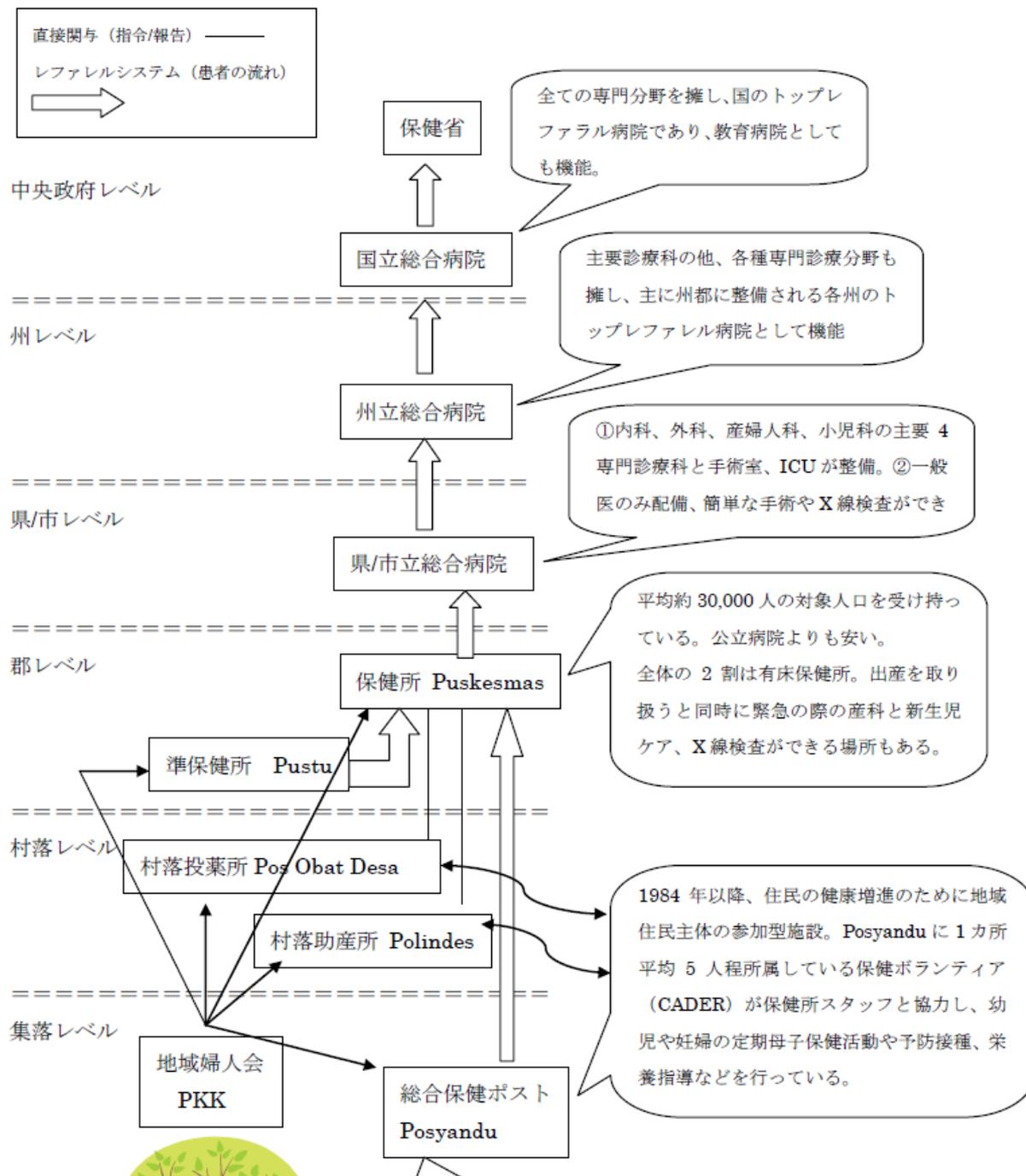
## 戦略4) 患者教育の改善と地域社会の啓発

- 1.) アドボカシー/啓発活動(Advocacy Communication, Social Mobilization : ACSM)実施する為の人材育成
- 2.) メディアキャンペーンがある。すべての行政区の結核対策チーム(国、州、郡レベル)に対してACSMに係る研修を実施し、アドボカシー活動の為のモジュールやツール開発を行う。世界結核デーだけではなく、年間を通してのキャンペーンの必要性や地域別の言語ごとのキャンペーンツールの作成を計画している。

- 戦略計画(2010-2014)

2014年新しい保健大臣決定後作成予定。

図 1.保健衛生行政組織



# プログラムの目的

- ・ インドネシアの伝統文化「ワヤン」によって結核のための啓発活動を行う。

⇒ 患者早期発見、長期治療の継続、差別・偏見の軽減

## エンターテインメント・エデュケーション(E/E)

- ・ マス・メディア(テレビ、ラジオ、音楽)を通じて娯楽的かつ教育的なメッセージを意図的に 企画し、実施する。
- ・ 「行動変容を起こす動機づけとして、新しい考えの認識からその考えに対するポジティブな態度の形成を通して、その考えの導入と実践に至る過程を示す。」
- ・ 視聴者は仲間同士の会話を誘発する媒介的な効果があり、互いが話し合うことを促す。
- ・ 教育的問題について視聴者の知識を深め、好意的態度の形成、顕著な行動の変化を目的とする。

# ワヤンに焦点をあてた理由

ワヤンとは・・・

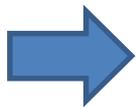
ユネスコに登録された文化遺産。

インドネシアのジャワ島を中心に千年以上の歴史をもつ伝統芸能。

ストーリーの題材の多くは、インドの叙情詩「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」などから採られ、ジャワ語で行われる。

ダラン(人形使い、進行役)一人によって、人形の操作やストーリー語り、音楽(ガムランや歌など)の指示を行う。誕生、成人、といった人生の節目や町や村の節句などの場で厄払いや魔よけの意味を持つ。

上演は大きな公園や講演会場のほか、大きな民家などが一般的である。夜9時ごろからはじまり、朝方(従来は4時ごろまで。最近は2時ごろまでが多い)まで行われる。会場のまわりには、食べ物やおもちゃなどの屋台が出て縁日のような賑やかさがあり、地域の大人から子どもまでが集まって楽しむ場となっている。



- 1) インドネシアの文化、生活、思考様式に根付いている。
- 2) ダラン(人形使い、進行役)の人々への影響力が大きい。
- 3) 様々なメッセージを楽しく伝えることができる。



上、右:ワヤンを上映するダラン(人形使い)とワヤンの上演とともに演奏する様子



# 事前調査：ワヤンによる啓発活動

外務省平成23年度NGO補助金による調査

期 間：2012年1月8日～1月15日

調査地：ジャカルタ、ソロ



## \* オリジナル「ワヤン」による結核の啓発活動 \*

2003年～2005年、劇団(AKARAWA)の中のメンバーが結核になったことから、知り合いの医師のアドバイスを受けて地域への啓発活動を国立結核プログラム(National Tuberculosis Program: NTP)へ提案。NTPと2003年3月24日の世界結核デーキャンペーンから開始。WHOとともに脚本を作成し、地域の保健所(Puskesmas)や地域ボランティア等と協力をして、約24,000人を対象に結核に関する啓発活動を実施した。

# 事前調査：ワヤンによる啓発活動

- 実施団体：AKARAWAの4チーム（4～7人で編成）。  
保健省、NTP、WFP、  
ワールドビジョン・インドネシア、 現地NGO、  
コミュニティーの人々。
- 対象地域：ジャワ島（ジャカルタ、ボゴール、タンゲラン、  
ブスキ）スマトラ島、カリマンタン島、マルク、北マルク  
※人口、学校が多く、患者発見率が低いところを選定。  
⇒地域の活動では、保健ボランティア（婦人会など）の協力が  
不可欠である。
- 実施場所：ジャカルタ・コンベンションセンター（約20名が実施）、  
学校（中・高校）、Pesantren（イスラム教を教える場所）、  
サンガ：公民館的な場所、駅裏など。



右:上映前の  
AKARAWAのメンバー



上、右:AKARAWAによる  
ワヤン上映の様子。  
人形はゴミとして捨て  
られてあったプラスチック  
から作られている。

# 関係者

インドネシア保健省、  
ストップ結核パートナーシップインドネシア、  
ソロ市保健局、地域保健ボランティア、  
平山医師(RIT)、河村准教授(熊本大学)、  
芹澤薫氏(ガムラン奏者、インドネシア在住)、  
演劇グループ: Komunitas Wayang Suket

インドネシア結核予防会(PPTI)  
支部  
活動  
世界基金のプログラム

# ワークショップの開催

日時：2013年11月21,22日 場所：ソロ市

参加者：PPTI(本部、ソロ支部)、ソロ市保健局、平山先生、下谷

\* コアメッセージ \*

- ①(病気が)完治できる、②薬は無料である、
- ③結核の治療は、周囲への感染を減らす



# オリジナルストーリーづくり

ワークショップの結果をもとに、ダランに伝統的「ワヤン」の物語を踏まえたストーリー作りを依頼したが、2014年1月5日にグンドノ氏が病気で急死し、甥であるワルヨ氏に代役を依頼。グンドノ氏が9割完成させていたシナリオを完成させた。



故スラメット・グンドノ氏(享年48歳)



スリ・ワルヨ氏 (36歳)

# あらすじ

## 1. オープニング

ダランと役者達が、賑やかな音楽に乗って走り回り、風刺的な歌詞を斉唱する。

## 2. プロローグ:グノデウオ誕生の逸話(ワヤン・クリ+役者)

臨月にかかったジュンボワティ(グノデウオの母)は、訪れが間遠になった夫クルスノの真意を問う。ウイスヌ神の化身であるクルスノ王は、生まれる子が異形の者であることを知り、隔離するか捨てるように言う。果たして、誕生した赤子は猿の如き姿をしており、しかも病気持ちで、父クルスノを始め周囲の人間に忌み嫌われる。ここでは差別に対する抗議が語られる。



## 3. グノデウオとジュンボワティと、横恋慕するドソサロノの場面 (ワヤン・ゴレ)

ジュンボワティは、異形のグノデウオを慈しんで育てた。魔物のドソサロノにジュンボワティが浚われた時、グノデウオは超能力を駆使して戦い、救い出した。その後、グノデウオは母親に暇乞いをし、穴倉で隠遁生活をするべく去っていく。

# あらすじ

4. 道化＝召使にして守護神でもあるスマルの病気騒ぎ(ワヤン・クリ)  
スマルの子供達が、冗談を言いつつ、病床に伏せっている  
スマルの世話をしている。スマルの症状(咳・微熱・痩せ・寝汗)  
に対して、末っ子のバゴンが、恋の病かもしれないと勝手なコメント  
をして、カナストレン(スマルの妻)を不安にさせる。まもなく  
ガトコチョとオントルジョ(スマルの仕えるパンドウオ5王子の  
2番目ビモの息子達)が見舞に現れて、薬師(伝統療法師)  
サデウオを呼ぶ。



## 5. サデウオと医者への訪問 (ワヤン・クリ、役者と本職の医者＋看護婦)

サデウオは、スマルの病気が呪術によるものでも恋の病でも  
ないと判断し、医者と呼ぶ。スマルを診察した医者は、症状から  
結核であると推定し、確定するためには痰と肺のレントゲン検査  
が必要であると説明した。その場で看護婦が痰を採取し、家が  
清潔でなく、陽当りも悪いと結核になりやすいと指摘した。  
ガトコチョ、オントルジョ、スマルの子供たちが、説明が終わら  
ないうちに国の清掃にでかける。サデウオと医者達がそれを追う。  
スマルと誤解の解けたカナストレンとの水入らずの場面。



# あらすじ

## 6. 清掃と医者による啓発の場面(ワヤン・ゴレ→役者)



ガトコチョとオントルジョが、国を清掃する傍ら、喫煙者がいれば直ちに煙草を取り上げ捨ててしまうのに呼応して、煙草の害・危険性を訴える歌が流れる。人形がダランから取り上げてしまう。

そこにサデウォと医者が現れ、健康に有害な物を退けるのは正しいが、強制するのではなく自覚を促すように説得する方が良いと忠告する。看護婦が、スマルは結核と報告し、医者が、継続的な治療によって結核は完治できること、それには家族の理解及び健康な生活週間(栄養摂取、陽光取入れ→細菌退治)が大切であること、保健所での投薬・治療は6カ月まで無料であること、他人にうつさないためにも完治が必要。続いて観客との質疑応答を挿む。

## 7. 穴倉の清掃とグノデウォの抵抗(ワヤン・ゴレと役者)

穴倉を清掃しに来たガトコチョとオントルジョは、ジュンボワティに阻止される。グノデウォが中にいるからという阻止理由を聞き、彼らは、グノデウォがもし病気に罹っていたら治療に連れ出す良い機会だと言って強行した。グノデウォと対峙して病気なのを知り、「国に還って保健所で治療しよう」と力づくで連れ去ろうとしたので、激しい戦いになる。

# あらすじ

## 8. エピローグ:スマルが手を降す(ワヤン・ゴレと役者)

病気が全快したスマルは、ガトコチョ+オントルジョとグノデウオの諍いの報を聞き、駆け付けた。待ち伏せ作戦でグノデウオを掴まえ、スマルが、自分の治療体験を話して説得を試みる。

最後には、グノデウオを、診断・治療のために保健所に連れていくことに成功する。  
(了)



# 上演後

- 地元新聞3紙 ( Solo pos, Jawa pos) による報道
- 世界結核デー (3/24) に地元テレビ局で放映  
TATVとISITV
- 第2回ナショナル・ストップ結核パートナーシップ  
アジアフォーラムでの報告 (平山先生)



# 調査結果

- アンケート結果

観客およそ500名（上演前、後の知識の比較）

- 回収数:196人

- 性別      男:105人   女:73人      無回答:18人

- 年齢      0-9歳:2人, 10-19歳:15人, 20-29歳:44人,  
30-39歳:35人, 40-59歳:64人, 60-69歳:12人,

- 70歳以上:2人, 無回答:22人

- ディスカッション結果

# 評価

## ・ワヤン専門家の評価

オリジナルのストーリー、演出、音楽は啓発に効果的であった。

ワヤン・クリ(影絵)、ワヤン・ゴレ(木偶人形劇)、ワヤン・オラン(演劇)の混合により、いろいろな世代にアプローチする要素があった。

また、物語の途中で保健所の医師による解説もよかった。

## ・E/E専門家の評価

質が良い。制作にあたり、さまざまな関係者が過程に関わりつくったことに非常に意義がある。上演後の医療者とのディスカッションも効果がある。

# 今後の展望

- 1) E/Eによる学術的研究を踏まえた評価
- 2) 啓発モデルとしてのインドネシアでの一般化（保健所や学校での展開など）
- 3) インドネシア以外の文化のある国での展開